

障害児学級における説明的文章の指導

——同一題材の異教材を使って——

浜 本 宏 子

○ はじめに

肢体不自由のごく軽い者から車イスにくぐられた重度の者まで、障害の程度や生活経験の量と質などがさまざまに異なったひとりひとりの生徒にゆきとどいた指導をしたいという思いで、私は三年前から説明的文章の指導を研究課題とした。

肢体不自由養護学校には、肢体不自由という一次的障害が原因で就学できなかったり、就学しても手や言語に障害があるために十分な学習ができなかったり、また生活経験が極端に少なかったりして、その結果、学習能力の遅れという二次的障害をもった生徒が多くいる。中学入学段階でひらがなの読み書きや短い文章の読みがやっとならぬ、内容の学習は困難な子や、ひらがなの読み書きが全くできない子もいる。しかし、精神生活のある部面ではその年齢相当の活動をしている。この子たちの一般的傾向として、直感的把握力や判断力はかなりあるが論理的思考に弱いということが出来る。また一般中学校から転校してくる短期入園の生徒たちも、その学習段階とそ違え、関係を認識していく力は十分ではない。

こういう生徒の実態と、基礎教科としての国語科の性質を考えた

とき、どの生徒にも

- (1) 読み通す力
- (2) 概要をとらえる力
- (3) 要旨をつかむ力
- (4) 感想・意見をもちつ力
- (5) それらを表現する力

を、中学部卒業までにはどうしてもつけたいと思った。主権者として生きていく基礎的な力をつけることが義務教育の課題なのだと思いついたからである。

そのためには、国語科の指導の中心に説明的文章をすえることがより効果的であろうと考え、指導のねらいを明確にしてみた。

- (1) 文章を正しく読む (読む)
- (2) 語句の意味を文脈の中で正しくとらえる (語彙・文字)
- (3) 何について書いてあるかがわかる (題材)
- (4) どのように書いてあるかがわかる (概要)
- (5) 組み立てをとらえる (段落相互の関係)
- (6) 中心をおさえてまとめる (要約)
- (7) 感想・意見をもつ (感想・意見)

(8) 新しく知ったことを確認し、発展させる (発展)

○説明的文章を国語科の中心にすえていること、○生徒の語彙が非常に少ないこと、○文字やことばの成り立ちを学習することによって日本語に興味・関心をもたせたいこと、などから一年目は教材の配列を、まず文字に関するもの、つぎにことばに関するもの、そして人文・社会・自然に関するものというふうに試みてみた。しかし、教材の配列より先にひとりひとりの学力に応じた段階的指導の必要性を痛感した。

そこで、二年目の七七年度は、A「説明的文章の段階的指導」を試みた。また、その段階的指導が単なる個別指導に陥らないよう、B「指導のあり方」について工夫してみた。生徒ひとりひとりが自分の力を十分に發揮しながら学習し、学級としても一つのまとまった学習となっている。そういう指導法を模索してみたかったのである。

三年目の今年度は、生徒の障害が重度化していることから、昨年度の段階を再検討していくことと、読みとったことを整理し定着させるためのノート指導に取り組んでいる。

本レポートでは、第二年度の実践をまとめてみた。

一、生徒の実態(77・11)

【中一】

古風、カタカナの読み書きができるようになった。小一で学習する漢字も少しずつ正確に書けるようになってきた。読みとりの力は弱い。二年遅れて入学。

石川 思考力は小五程度で、自分の考えをまとめることもでき米田 漢字の読み書きがわずかしかできないために、小二程度

の教材を使用。口や足による書写で、文字を書くのに時間がかかる。石川は小二、三年を不就学。米田は小一、二、三年を不就学。

宮崎 小三段階の読みはできるが、読みとりや考えをまとめることはできにくい。書写に時間がかかる。宮崎は小一と小五を不就学。

永石 小四段階の読みはできる。考えをまとめることができにくい。不就学期間なし。

前田 小五段階の読みはできるが、漢字を書く力は小三程度である。考えをまとめることができる。不就学期間なし。

稲村 中一段階の学習ができる。不就学期間なし。政野は一年遅れ。

古賀

【中二】

半田 中一でひらがなの読み書きができるようになった。漢字やカタカナを覚え始めている。語彙がどんどんふえている。音節読みをする。言語障害。小六一学期まで不就学。

江頭 中一でひらがなの読み書きができるようになった。中一になってから足での摂食・書写に取り組んだ。漢字やカタカナも覚え始めている。ひらがなの文はすらすらと読めるようになった。小五まで不就学。

大羽 小二段階の読みはできる。考えをまとめることができにくい。不就学期間なし。

大中 小四段階の読みはできる。考えをまとめることができにくい。坂本 中中は小四から小六の一学期まで不就学。坂本は小一か

ら小二の二学期まで不就学。

有松 小五程度の理解力があると推定。漢字力は弱い。音声による言語表現が困難である。

高山 小四、五年程度の理解力があると推定しているが、音声・文字による表現は殆んどしない。自閉的傾向がある。

中三

小川 小四程度の読みはできる。考えをまとめることができにくい。不就学期間なし。

釜畑 小四段階の読みはできる。中二の後半から非常に学習意欲が湧き、積極的学習をしている。小四まで不就学。

柴田 小四段階の読みはできる。まとめる力はもっているが、読みとりが雑である。書写に時間がかかる。

岩橋 小五段階の読みはできる。関係づけまとめる力が十分ではない。岩橋は小四まで不就学。

久具 小四まで不就学。

大里 中二段階の学習ができる。二人とも不就学期間なし。

谷川 小四まで不就学。

このように、中一では十名の生徒がそれぞれ小一から中一までの学習段階にいる。中二も小一から中二までの段階にいる生徒たちで構成されていたが、中二段階にいた生徒たちが、九月と十月にそれぞれ退園して地元へ転出して行った。中三では比較的学力が揃っていて、小四以上の学習をしている。

二、説明的文章指導の実践

1 同一題材の異教材で

「生徒ひとりひとりの力を伸ばす」という視点に立ったとき思いつく最も簡単な方法は、個別指導である。しかし、著しい能力差への対処としての単なる個別指導には物足りなさがある。またこれは、生徒の優越感、劣等感を助長するマイナス面ももっている。できる子、できない子のレッテルを外してお互いに教え合い学び合う教室、つまり相互に磨き合う集団学習の妙味をもった教室を作るためにはどうしたらよいかと考え続けているうちに、「同一題材を使ってみよう」と思いついた。

同じ題材について書かれ、視点や文章構成や学習段階の異なる教材を集めた。文章の長さ、構成・内容・使用漢字・文字の大きさなどの面から、教科書にある教材が好都合である。一昨年度から集めていた各社の小・中学校教科書を分解し、ジャンル別・題材別に分類した。その結果、説明的文章では、例えば「ことば・文字・記号」で約四五、「動物」では約三五の教材が集まった。そこで、題材は同一であるが教材の内容などが異なっており、ひとりひとりの生徒の学力に合った個別の教材を与えることができた。

なお、学習にはいる前に、「教材は異なっているが、説明的文章というジャンルにおける学習目標（p2～p3）は同じであること、その目標に到達するためにひとりひとりに合った学習方法を考えていきたいこと、題材は同じであること」を説明した。また、「自分の教材で学習したことは自分だけしか知らない。だから、自分たちが得たことをお互いに教え合い、学び合おう」と言うとき、生徒ははっきりと「面白そう」という表情をした。その表情を見て、この方法だと、優越感、劣等感といった心理的抑圧からの解放も望めると思った。やがて、生徒たちの積極的学習意欲がそれを証明してくれ

た。

2、中一・中二における実践

中一

題材		教材名	材	
グループ			学年	出版社
1、古屋	植物	秋のくだもの	小二下	教出
2、石川・米田		たんぼのちえ	小二上	光村
3、宮崎・諸富		植物も動く	小三上	教出
4、永石・前田		旅立つ種子たち	小五上	日書
5、稲村・古賀・政野		日本人と自然の間柄	中一学	図

△1、古屋▽

ねらい 一文一文の確かな読みとりをして、書かれている事柄の大体を理解する。

(略)

古 (指でおさえながら、上手に読めるようになった。)

T いま読んだ文章は、何について書いてあるの？

古 秋のくだものについて。

T そう。秋のくだものについて書いてあったわね。

古 はい。

T 秋のくだものうち、何と何が書いてあった？

古 みかんとくりとバナナと……

T もう一度読んでごらん下さい。バナナがあったかしら？

古 (読む) 先生、ありませんでした。

T くだものは何と何が出ていましたか？

(「1、秋のくだものには、どんなものがありましたか」とノートに書く。)

古 かきとりんごとみかんです。

T ノートに書いておきましょう。

古 (書く。)

T じゃ、かき、りんご、みかんは、どんな地方で作られると書いてありますか。(「2、かき、りんご、みかんは、どんな地方で作られますか」とノート)

古 (読む。)

※ 三つのくだものそれぞれの産地を流みとることができない。ここで、一つ一つの文の確かな読みとりにはいる。

T かきは、どんな地方で作られますか？

(「3、かきは、どんな地方で作られますか」とノート)

古 (かきの段を読み、りんごの段までも読み続けている。)

T かきについて書いてあるのは、どこからどこまで？

古 ここ(かきの段第一文)からここ(りんごの段第二文)までです。

T ここ(りんごの段第二文)を読んでごらん下さい。

古 りんごの花は、白かうすも色で、一つのところに、六つぐらいつつ かたまつて つきます。

T かきについて書いてあったかしら？

古 いいえ。

T じゃ、何について書いてあったの？

古 りんごについてです。

T 私は何について書いてあるところをきいているの？

古 かきについて。

.....

※ 前時とほとんど同じことをくり返したが、終わりに、

T そう。ここはりんごについて書いてあるの。じゃ、かきは

どこまでかしら？

古 ここ（かきの段最終文）まで。

T そう。ここまでね。では、ここまでをしっかり読んで答えを書いて下さい。

.....

T かきはどんな地方で作られますか？

古 さむい地方。

T どこに書いてあるの？

古 ここ（りんごの段第一文）。

T 読んでごらん下さい。

古（読む。）

T 何について書いてあった？

古 りんごです。

T そう。りんごね。かきじゃなかったわね。

古 はい。

T じゃ、かきはどんな地方で作られるのかな？かきについて

書いてあるのはどこからどこまでだったかしら？

古 ここからここまで（かきの段）。

T そうね。ここからここまでの間で、かきが作られている地方について書いてあるのはどこかしら。

古 ここ（と、地方という漢字を指す。）

T どんな地方と書いてある？

古 （答えを含む文を読む。）

T どんな地方と書いてあった？

古 たいいてい地方です。

T そう。たいいてい地方で作られるのね。ところで、たいいてい地方って、どういう意味？

古 どうでもということ。

T そうね。答えをノートに書いておきましょう。（答えは問題文より一字下げて書くように指示。 ※ 一二マスノート

使用）

.....

古 （たいいてい地方 と書く。）

T では、つぎの問題ね。（「4 かきの花は、いつごろひら

きますか」とノート）

.....

※ この子は、文字を文字として読んでいただけであった。一つ

一つの文を確かに読ませていくことによって、意味を表わす

文・文章として読むことができるように指導していき、花の

色・食べ方などについて何とか読みとらせることができた。こ

の段階をもっとくり返して、「読みとる」ということを学習させなければならない。

△2 石川・米田▽

ねらい 一文一文の確かな読みとりをして、たんぼぼが変化し

ていく様子を時間的順序に従って読みとる。

課題 たんぼぼが変化していく様子を、その順序に従ってノートに書きなさい。

○ 番号を打つこと。

○ 変化していく様子はできるだけ短く、しかし大切な所は落とさないように。

※ 石川さんはたんぼぼの変化以外のことも書いており、米田さんは変化そのものを落としている。

そこで、二人で話し合いながら一文一文を吟味し、

(1) 変化の様子を書いた文か、変化する理由を書いた文かを読み分ける。

(2) 変化していく順序をきちんと読みとる。

ことに留意させた。(1)によって文と文との関係(事実とその説明)に気付かせ、この読みとりをきちんとすれば、(2)の順序が自らとらえられることに気付かせた。(1)の学習がとても楽しそうだった。

△3、諸富・宮崎▽

ねらい 二つのものの類似点、相異点を読みとる。

課題 おじぎそうとねむの木について

(1) 葉の作りのにているところ
(2) 葉の動きのにているところ

※ それぞれの葉の作りや動きを読みとりぬき出すことはできなかったが、類似点をはっきりとらせることはできなかった。二つのものを読み比べていくということは大変な作業なのだ。そこでまず、おじぎそうとねむの木のそれぞれについて、葉の作りや動きをきちんと読みとらせた上で、二つのものを比較させていった。

それにしても、葉の作りや動きを文面から想像するためには、植物に関する知識がかなり必要である。木や草にふれることの少ない生活を送ってきた子どもたちの場合、葉の作りや動きという細かい部分に関する読みとりは、特にむずかしかったようである。

△4、永石・前田▽

ねらい (1) 説明されている内容を大まかにつかみ、段落に分かれてにことに気付く。

(2) 段落相互の関係を考えながら、文章構成を把握する。

(3) 文章構成図を書く。

T 「旅立つ種子たち」は全部でいくつの段落からできているか、一つ一つの小段落に番号を打ってみましょう。

永 19、

前 18、(後で19と修正)

T この文章は何について書いてあるの？

前 種子の旅立ち方につて

T そうね、どういふ旅立ち方について書いてありますか。

前 さやをわったり、風にのったり、

永 衣服にくっついいたり？

T そうね、いろいろな旅立ち方があるのね。どんな旅立ち方

があるか、最初から見てみましょう。

まず、第一段、どんなことが書いてあるかしら？

前 植物は自らの種族をふやすために、種子をさまざまな方法

で遠くへ旅立たせる。

T そう。ここには旅立ちの目的が書かれていました。

第二段は？

永 第一に、種子を、自分の力ではじき飛ばす植物がいる。

T そう。どんな植物かな。第三段

永 マメの類。さやが強い勢いでわれる。

前 第四段はカタバミ。さやが強い勢いでそり返って種子をは

じき出す。

(というふうには第六段まで進んでいき)

T 第六段の「これらの植物」というのは、どの植物をさして

いるのですか。

永 マメの類、カタバミ、ゲンノショウコ。

T そうね、ここまですまとめてみると、

①植物は自分の種族をふやすために、種子をさまざまな方法

で旅立たせる。

②自分の力ではじきとばす

③ マメの類—さやが強い勢いでわれる

④ カタバミ—さやが強い勢いでそり返る

⑤ ゲンノショウコ—さやはさけて勢いよくはね上がる

前 となります。第二にはどんな方法があるのでしょうか。

T 自分の力以外のものを利用する植物。

T ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

氷 風を利用する。

T そう。これから先は自分たちでまとめていって下さい。

※ 前田君は読みとりが少々荒かったので正確な読みとりをするように注意して段落相互の関係を明らかにさせた。文章構成図はほとんど独力で完成。

永石さんは、小段落の読みとりはひきがるが、段落と段落との関係把握が弱い。並列してしまう。予告・説明・まとめなど、各段落の性格を統むるように指導して学習を深めた。

△5、稲村・古賀・政野▽

ねらい、(1)事実と意見とを読み分けて、筆者の考えを要約する。

(2)段落相互の関係をとらえ、文章構成を把握する。

中二

魚		題材	教 材	
		グループ	教材名	学 年
2	有松・大中 坂本・高山	さげが大きくなるまで	小四下	教 出
		とる漁業から育てる 漁業へ	小四下	日 書

△1、江頭・大羽・半田V

ねらい 必要な部分を統みとることを重ねて、全体の内容の大体

を理解する。

(三人とも一応読めるようになった。)

T (第一段を読み、三人ともさげを知っていることを確認)

生まれたときのさげの赤ちゃんのようすが書いてある所を

ぬき出しなさい。

(第三段全部をノート)

大)

T 問題は何だったかしら？

大 生まれたときのさげの赤ちゃんのようす

T そう。だから、この答えには、書かなくてもいいことまで

書いてあるわね。どこを消したらいいかしら？

(第一文を消す)

大)

T そうね。「さげの赤ちゃんは、いつ生まれますか」という

質問なら、「冬の間に、たまごから さげの 赤ちゃんが

生まれます」という文が答えになるけれど、生まれたときの

赤ちゃんのようすをさがすのだから、この文はいらない。も

う一度よく読んで、正しい答えにして下さい。

半

(第二段——おとなのさげが卵を生みつけるまで——を何

度も読み返している。「さげの赤ちゃんの様子を書いたとこ

ろは見つかった？」と尋ねると、「いいえ」と言いながら第

三段へ進もうとはしない。そこで、第二段の各文について、

一文ずつ読ませ、誰の動作であるのかを確かにさせて、)

T いま読んだ所に出てきたのは、だれだったかしら？

半 おとなのさげ。

T そう。おとなのさげだったわね。赤ちゃんのさげは？

半 出てきていません、

T そうね。じゃ、ここは何回読んでも答えは出てこない。つ

ぎへ進んでごらんなさい。

.....

(このようなやりとりをした次の日、やっぱり第二段を読ん

でいる。前回と同じことのくり返し。やっと三段にはいる。

三段にはいったところで終業のベル。)

.....

(三時間目も、前半は同じことのくり返し。しかし、第三段に

はいり、第一文「冬の間に、たまごからさげの赤ちゃんが生ま

れます。」を読み、

半 あった(とにっこり)。

(以後、読みのスピードはぐっと上がる。)

※ 江頭、大羽——必要な部分の読みとりを通して内容の大体を

とらえさせたあと、時間的、空間的順序とさげの成長との関係

を表にまとめさせた。

半田——一つ一つの文を確かに読みとらせ、各段の内容の大

体を理解させた。一文一文の読みとりをしていく中で、「読み

とる」ということの意味がわかったようすで、必要な部分の読み

とりにはいつてからはかなりのスピードで進んだ。

.....

△2、有松・大中・坂本・高山V

.....

ねらい (1) 小段落ごとに要約し、大段落をとらえる。

(2) 段落相互の関係をとらえる。

課題(1) 小段落ごとに内容をまとめる。

① 小段落の数(16)を確認。

② 1・2の小段落について要約の仕方を学習。

③ 3・16の各小段落について、中心であると思う部分に傍線を引く。

④ 話し合いによって、正しい要約文を作っていく。

(2) 小段落をまとめて大段落をとらえる。

(3) 大段落を要約する。

なお、この授業をしていく際に、まず教材を滞りなく読むことを第一の条件にした。読めるようになった者から最初の数ページを全員の前で朗読し、課題にはいることにした。

3 中三における実践

中三では、学習にはいる前に、中学を卒業するまでにどうしてもつけておきたい国語の力(P一〇七参照)があることについて話した。生徒は真剣に耳を傾けていた。この話をしたあとで、「日本語」に関する教材を15程配り、学習したい教材を自分で決定させた。

(1) 学習課題の設定

この教材で自分はどういうことを学びたいかについて考え、その中から三つを選んで学習課題とすることにした。また、課題の

妥当性についても考えさせた。課題を設定させることは、「読みを深め」、「問題意識をもち」、「注意を集中して学習に取り組む」のに効果的だからである。

教材と学習課題例

方言と共通語——①方言とは何か。共通語とは何か。②共通語の必要性。

ことばの意味——①ことばの表す意味 ②類義語同士の相違点 ③類義語と対義の関係。

2、学習課題の相互確認

課題が決定した生徒から板書させた。お互いの課題を知らせ合うことによって学習への興味を持たせることができる。また、個別の課題に取り組む真剣な姿勢と、みんなで「日本語」について明らかにしていくという集団学習の意識とを作り出したかったからである。

3、学習結果の発表

○プリント

「説明する時にしやすく、聞き手には見ただけで分かるようなノートのとり方を工夫すること」という注意を与えていたが、ほとんどの生徒が簡条書きのような書き方でまとめていた。ところが、ノートにまとめたものを各自でプリントにして全員に配るといふ段になって、まとめの書き方をさらに検討して書き換える生徒も出てきた。でき上がったプリントは、簡条書きのノートと比べると、課題と解答、中心と説明とがきちんと区別されていた。

発表するための準備として、学習したこと整理と、発表のための工夫とが積極的にに行われたわけである。

○ 録音テープによる発表と意見交換

「発表も意見も、聞き手に分かりやすく柱を立てて発言するよ
うに」、「発表は五分間。テープで行うこと」とした。声の大き
さ、速さ、間のとり方、説明の仕方などについて事前に簡単な注
意をしておいた。

発表当日は、発表者も自分の説明を客観的に聞くことができ
て、友だちからの意見や注意を真剣に聞いていた。

三、実践の中から考え出したこと

A 説明的文章の指導の段階

1、ことばと文の理解

2、内容把握

① 一つ一つの文における主語・述語の照応をおさえ、文と文
とのつながりを確かめながら読むことを通して、文章の内容
の大体を理解する。

② 何について書いてあるかをとらえる。

③ 時間的、空間的順序を考えながら、内容を正確に読みと
る。

3、必要な部分の読みとり

① 課題を正確に認識しながら、文章の中から必要な部分を読
みとる。

② 課題を正確に認識しながら、文章の中から二つのものの類
似点や相違点を読みとる。

4、要約

① 小段落ごとに要約し、大段落をとらえる。

② 中心的部分と付加的部分とを読み分けて段落ごとに要約す
る。

5、文章構成
③ 事実と意見とを読み分けて、筆者の考えを要約する。

④ 指示語や接続語に注意をして読み、段落相互の関係をとら
える。

⑤ 段落相互の関係をとらえ、文章構成を把握する。

⑥ 文章構成を把握することによって、筆者の思想の論理的展
開のようすをとらえる。

6、意見・感想

① 筆者の考えや論理の展開に対して、自分の意見や感想をも
つ。

7、論理的思考・表現

① 確かな材料で、筋道だった思考、表現をする。

B 指導法

1、説明的文章学習の意義とねらいの確認

① 生きていくために必要な力

② 集団学習の中の個別学習

——同一題材異教材——

2、教材選定

3、学習課題の設定

- ① 通読後、各自で学習課題を設定
- ② 課題の妥当性の検討
- ③ 学習課題の相互確認(板書・プリント)

4、学習状況の報告

- ① 新しい発見・疑問点・悩みの報告
- ② 刺激とヒントでさらに深い学習

5、学習結果の発表

- ① プリントにまとめ、テープで発表
- ② 意見の交換

6、学級としてのまとめ

- ① 学習の広がり

同一題材異教材の利用によって異なった視点からの

学習

- ② 教え合い、学び合うことの喜び

優越感からの解放

○ おわりに

今後の課題として、次のことを考えている。

- 1、各段階の内容と系統性についての検討

- 2、それぞれの段階にふさわしい教材の発掘

- 3、中学部三カ年を見通した説明的文章教材の配列

- 4、学級集団の構成員としての一人一人が力一杯伸びていくの

と同時に、学級全体が成長していくような指導の工夫